

世界に向けて東日本大震災を記録する

―危機アーカイブの効用と構築のための課題―

アンドルー・ゴードン

第一四回丸山眞男文庫記念講演会は、ハーバード大学教授アンドルー・ゴードン先生（エドウィン・O・ライシャワー日本研究所元所長）をお招きして、二〇一二年七月五日、東京女子大学で開催された。本『報告』では、ゴードン先生ご自身の校正を経て、講演全体の記録を掲載させていただいた。また、掲載にあたり、講演の際に使用された画像の一部をご提供いただいた。なお画像は、当センターのホームページでより鮮明なものを閲覧できるので御参照されたい（office.twcua.jp/facilities/maruyama/project/meeting/lecture14.html）。

なお、ゴードン先生が中心となって進められている「2011年東日本大震災デジタルアーカイブ」プロジェクトの現在の状況は、jdarchive.orgより確認することができる。

アンドルー・ゴードン先生に深く感謝申し上げます。

東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター長 大久保喬樹

ご紹介ありがとうございます。こんな風に東京女子大学で講演できることを大変嬉しく光栄に思います。実は、このキャンパスを訪ねるのは初めてです。日本には一九六九年以来ほぼ毎年来ています。だから四〇回以上。それなのに、こちらに伺っていなかったことについては、とても申し訳なく感じています。しかし三つの理由で、この大学、そしてこの丸山文庫には大変身近な感じがします。

一つは、私の妻は、大昔ですが、この大学の学生でした。でも、卒業しませんでした。それは、本人に言わせると別に成績が悪かったためではないようですが。とても印象的な先生がいらして、ぜひぜひアメリカへ留学しなさいと勧めてくれたんだそうです。そしてその励ましがあって留学したわけです。ところが、こちらへは戻ってきませんでした。お父さん、お母さんはかなり困ったようです。結局向こうで学位を取りましたから、しばらくの間は在籍のままです。向こうで

卒業したところで、ついでに僕と会ってしまったわけで（会場…笑）、理由と因果関係は複雑ですが、結局アメリカで暮らすことになりました。

もう一つは私が松沢弘陽先生と長年の友人であり、彼が私の最も尊敬する日本の学者の一人であるためです。松沢先生は、丸山文庫創設時に尽力なさった方です。今回の話をぜひしてくださいと松沢先生から依頼があり、もちろん快く引き受けました。

そして三つめの理由は、学部で日本の歴史を勉強し始めた時、戦争直後に書かれた丸山先生の論文に出会って、これはとても素晴らしい論文だと感じた記憶がまだ頭に残っていたからです。その後、徳川期の思想についての研究も読みました。そちらは英訳されたので非常に助かりました。日本語の文章は長くて難しかったからです。残念なことに丸山先生にお会いできるチャンスはなかったんですが、こんな形で、丸山文庫が主催する記念講演会でお話できることは本当に光栄です。

今日の話は、一見丸山眞男先生の関心からほど遠いように見えるかもしれませんが。先端技術をもつデジタルアーカイブ構築と丸山眞男に何の関係があるのか。ただ、先ほどご紹介で知りました。丸山文庫もこれからデジタルアーカイブ化を進めるということを。ですから、その意味では縁のない話ではないかもしれません。そしてもう一つ重要だと思うのは、今日話をお聞きになればわかるかと思いますが、私たちが目指しているこの大震災デジタルアーカイブ構想は、社会において公共の場を形成すること、そしてその場に市民が個々、あ

るいは集団で参加できることを目指しているもので、まさに丸山先生が日本に出現することを願っていた市民社会的発想が、プロジェクトの根底にあるのではないかと思います。そして今日は、そのアーカイブを何故作ろうとしているのか、どういうものであるかを紹介し、今後の課題をあげながら市民が参加できる開かれた社会に向けてのプロセスや問題を一緒に考えたいと思います。

まずお話ししたのは、遠く離れたハーバード大学でどうして東日本大震災の記憶を残すためのデジタルアーカイブを作っているのかということです。その背景を説明しますと、昨年の三月一日はちょうどハーバード大学が春休みに入る日で、学生が皆キャンパスからいなくなる時期でした。その日は授業があるにはあったのですがほとんど誰もいなくて、留学生を除いてほとんどの学生が地元へ帰るわけです。でも教職員はいて、皆びっくり啞然としました。そして、うちの研究所では——日本のことを研究する日本研究所です——、その翌週の月曜日一四日ですか、教職員何人かが緊急に集まって、研究所として何かしなければならぬと話しました。何をすればいいか、となると、一つは学生と職員と教員が手を組んで行なう支援活動。義捐金を集めたりすることに力を入れたわけです。これは学生がリードして私たちがバックアップしました。もう一つはこの大震災がもたらす影響、その意味を考える場を大学の中に設けることでした。福島第一原発の問題もそうだったし、医療施設がどうなっているのか、いろんな問題を考えるシンポジウムやイベントを開きました。それは今年に

なつてからも続けています。

しかしそれだけではちよつと足りない、最初から皆感じていたわけです。やはりこの震災は大きな出来事だ。そして、研究所としては将来の研究者のためにも、あるいは研究者だけでなく一般の方のためにも何かしなければならぬと考えていた。ある同僚は、三月一四日あるいはその翌日に、おそらくこの大震災は私たちが生きている間に（彼は僕とほぼ同い年ですが）、日本で起きた最も深刻な出来事ではないか、そういう形で歴史に残るのではないかと話しました。津波・地震プラス福島のリルトダウンもあり、その可能性は十分あると思いましたが。やはりこれに関して将来に記録を残すためには何かしなければならぬと決意しました。

研究所の方では、既にデジタルアーカイブの企画がもう一つあったんです。比較的小さなプロジェクトでしたけれども。ある同僚が日本の憲法改正問題に大変関心を持っていたわけです。そして二〇〇〇年代の初めから憲法改正の動きが再燃した時に、それに関する議論の多くは、英語で言う「born digital」デジタルな形でしか存在しない、要するにウェブ上の議論が多いと気づきました。となると、書類、本、文献などを集めるだけでは、将来の学者達は憲法改正の動きがどうだったかを知ることができない。ですから、ウェブサイトをアーカイブ化する仕事を始めました。

その経験を踏まえて、今回は東日本大震災に関係するウェブサイトのアーカイブを作りましょうと、（私はあの時、所長でしたので）言い

出しました。皆、賛成したので一日でウェブサイトを一〇〇ほど集めました。でもすぐに分かったのが、これは一つの研究所だけではとても無理な作業だということでした。情報を收拾する能力も、保存する能力も、探し出す能力も、私達の能力を大幅に超えていたからです。あとデジタル情報というのは、ウェブサイトだけではなくて写真もあれば動画もある。そして、それぞれの写真などを個別に保存しなければなりません。このような大がかりなプロジェクトは、他の組織と連携しないとできない。この事実気づいた時、幸い、一緒に仕事できそうな人たちが見えてきたわけです。それで、ネットワーク型アーカイブとなりました。

ですから「東日本大震災デジタルアーカイブ」を作り始めた時から一年数か月の間、（今日はそのベータ版を紹介しますが）、キーワードが三つ出てきたと思います。一つは「繋がり」（あるいは「連携」）。いろんな組織との繋がりなしにはこのアーカイブはとてできないということなんです。もう一つは「発見」。このアーカイブの意義は、いろんな記録を発見できるところにあります。そして、三つめは「参加」。参加型アーカイブを目指しているわけです。このキーワード三つをベースにして、話を進めたいと思います。

「繋がり」を紹介するために、まず図1をお見せします。要するに、一つの研究所、一つの大学、一つの組織の力を超える幅と深さとインパクトを持つ災害ですので、いろんな組織と一緒に動かないと本来あるべきアーカイブができないわけです。ハーバード内部でもそうでし

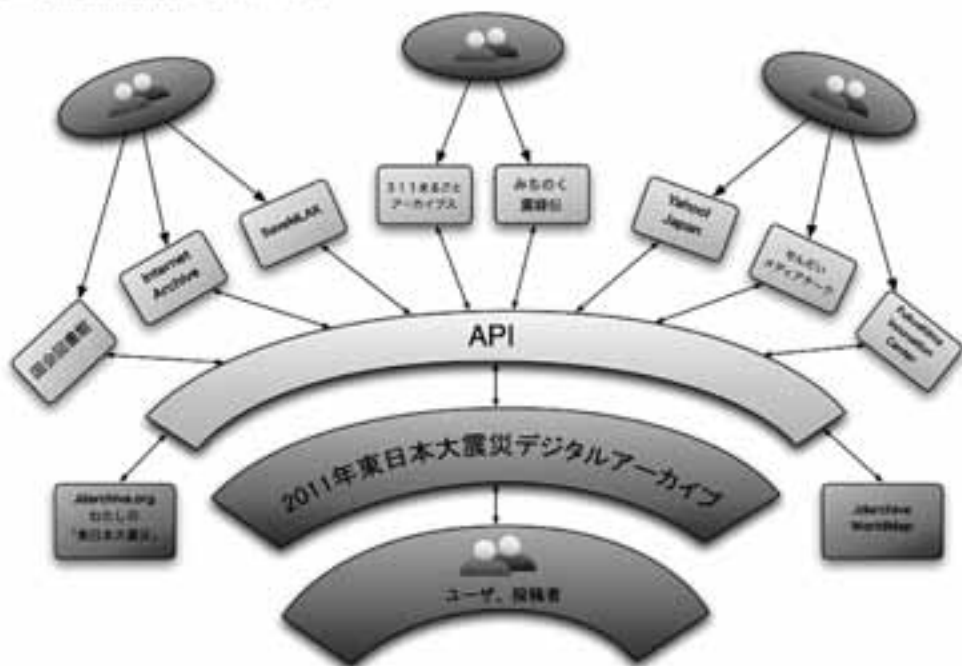


図1 アーカイブ・パートナーのネットワーク

た。たとえば、研究と教育のための新しい技術を開発する研究所がありました。【MetalAB】と言います。そのスタッフとも連絡をとり始めた。運の良いことに、その研究所はふた月ほど前に設立されたばかりで、仕事を探していたところがありました。そのため、これはやるべきことだとすぐ応じてくれた。それから地理学を専門にする研究所もありましたから、そちらも地図作りなどを手伝ってくれました。でもそれだけではなくて、他の、特に日本での組織もたくさん情報を集めたりしていたことがすぐ分かった。これらの組織と連絡を取りながら、段々とうちの役割が何か、どんな役割分担で取り組むべきかが見えてきました。インフォーマルではありますが、この図1のような形です。

ここで強調したいことは、私たちの研究所ではほとんど資料を集めていないということです。少しは集めているんですよ、投稿された個人的な体験談。そのための投稿フォームがサイトにありますから。でも、それは一〇〇人足らずなんです。やっぱり遠くアメリカまで「私のお話」を送ることを、そう簡単に人々はしませんから。それが印刷物であっても、聞き取りであっても、オーラルヒストリーであっても、写真・動画であっても、やっぱり現地で情報収集を行なうことは理にかなっています。地図作りやアーカイブの基盤ソフト作りなど、ハードでやっていることは図1で「2011年東日本大震災デジタルアーカイブ」「Jdarchive.org わたしの「東日本大震災」」「Jdarchive WorldMap」で記された部分です。あとはこの図からも分かるように、

アーカイブの中身は様々な組織が集めたコンテンツです。中にはもちろん、すぐにウェブサイトのアーカイブ化に取り組んだ日本の国会図書館もあります。

もう一つ、日本国外の組織で重要な役割を果たしているのが「インターネット・アーカイブ (Internet Archive)」という、昨年(2019)の三月まで私が聞いたことがなかった組織です。これは一九九六年設立の組織です。今の世の中で起きていることを将来に残すため、ウェブサイトを保存しなければならないと、この組織の創設者は考えました。ウェブサイトのいわゆる「消耗率」は高いのです。というのは、ウェブサイトに新しい情報がどんどん入れれば古い情報は削除されるし、時にはウェブサイト自体が消滅してしまふ。未来の人たちが今を知りたいと思うならば、やっぱり誰かがそれを保存しなければならない。「インターネット・アーカイブ」はウェブサイトなどの保存を使命としています。

そして五年ほど前からは、通常のウェブサイトを保存するだけではなくて、緊急時に、英語で言うところの spontaneous event archive (出来事アーカイブ) もしくは事件アーカイブと翻訳できるでしょう) を作っています。大きな出来事が起こった時には、情報がものすごく速いペースで変わるから、すぐにそれを集めなくてはならない。「インターネット・アーカイブ」は、私たちと連絡を取る前、三月十一日の午後からすでにウェブサイトを、最初は主に英語か西洋圏のニュース報道のサイトを、一〇〇〇ほど保存し始めていました。保存というのは、コピー

を作った自分のサーバーで保存するということです。つまり、保存対象のサイトのホームページとその関連ページとその中の報告書や写真を保存するわけです。こういった組織の存在を知ってすぐに電話し、「一緒に仕事しましょう」と提案しました。向こうは喜んで賛成しました。「こちらには日本語のできるスタッフがいないし、収集することは得意でも何を集めるかはその場その場で専門家に頼まないとダメです」とのことでした。それでうちの研究所はキュレーションというか、何を保存すべきかをアドバイスしていくことで合意しました。うちのスタッフはサイトを記録し、キーワードなどを入れて「インターネット・アーカイブ」にその情報を回しました。向こうはそれを保存しています。

その他には日本で「saveMLAK」という博物館・美術館・図書館・文書館・公民館の記録を保存している素晴らしい組織もあれば、「311まるごとアーカイブス」という組織も三月か四月の時点から地元でいろんな人と協力しながら記録を取り始めました。デジタルな記録を作り始めたわけですね。あと、仙台市に「せんだいメディアテーク」というパートナーがあります。福島の場合はより複雑で行動を起こすのは遅かったけれども、デジタルな記録を集め始めてはいます。「せんだいメディアテーク」は市の施設で素晴らしいデジタルアーカイブ・プロジェクトを進めています。市民が参加しているような動画や音声、聞き取りをし、公開しています。東北大学へ一昨日行って話し合いましたが、「みちのく震録伝」というアーカイブ・プロジェクトもあり、重

要なパートナーです。その他にも、この図に載っていない大きな組織も小さな組織もあります。

日本でこれほどアーカイブ活動が進んでいるのであれば、私たちが遠くで何ができるのか、何をすべきかとの疑問が当然出ます。結局、日本にあるアーカイブを結ぶ装置をつくれれば、いろんな人が参加できる。後ほど「参加」の意味あいを説明しますが、人々が参加できるものを作ればこれは意義のある営みになると考えています。また、図1で「ユーザー、投稿者」と書いてありますが、もう一つの目的はアーカイブを使うユーザー、つまり活用者と、アーカイブを作る人、つまりアーカイブにコンテンツを入れる投稿者の区別をなくすることです。ユーザーはもちろん国会図書館や「インターネット・アーカイブ」など、各アーカイブのサイトに直接行って、情報を検索することができます。でも網羅的にこれを把握した方がより深い理解が得られるんじゃないかということで、それぞれのアーカイブの連絡装置を作ってきました。

今日はあんまりテクニカルな話をしませんが、一つか二つほど許してください。昨年三月まで私も聞いたことがない言葉でしたがAPI、英語で Application Programming Interface というものがこの連携型アーカイブのために大変重要です。この用語を暗記するのに半年かかりました(会場：笑)。やっと去年の秋あたりに問題なく言えるようになりましたし、今になって説明できるようになりました。要はウェブサイトとウェブサイトが話しあう、連絡しあう、コミュニケーション

ションしあうための小さな装置、小さなソフトです。例えば、あるユーザーが南三陸の写真を見たいと思い、うちのサイトの検索窓にその地名を打ち込みます。するとうちのサイトから、すべてのパートナーサイトへと問い合わせが行きます。「あなたのところは南三陸に関する写真ありますか」と。答えは「はい。ありますし見せても良い」。場合によって「ありますが、ごめん、見せたくない」。こうしたやり取りがサイト間で行われます。このようにAPIを使えばそれぞれのアーカイブの独自性を尊重しながらコミュニケーションができるのです。これで複数のアーカイブを結ぶ連絡型、ネットワーク型アーカイブの説明を終わります。

次に「発見」というテーマに移りたいと思います。この連絡型アーカイブでどうやって情報を発見できるのでしょうか。図2をご覧ください。うちのアーカイブのホームページです。コレクションについては後で紹介しますが、ホームページの下の方に最近ユーザーが作ったコレクションへのリンクがあります。今のところ、内部のスタッフがユーザーの立場で作ったコレクションが多いですが、これからいろんな人がいろんな材料・情報のコレクションを作るよう期待しています。このホームページから簡単に検索を始めることができますし、あるいは検索ページに行ってもっと細かい検索もできる。ここで簡単に「津波」という言葉を入れると、現在のところヒット数は二万ぐらいです(図3)。さっきのアーカイブ・パートナーの図(図1)には載せるスペースがなかったのですが、重要なパートナーとしてUCCLAの



図2 ホームページ top 画面



図3 「津波」検索結果

「Hypercities」という組織があります。そこはツイートを集める仕事をしているわけです。東日本大震災の後の六〇万程のツイートを集めました。膨大な数に聞こえませんが、ツイッターの世界では一〇万単位というのはそれほど多くありません。しかし、これは非常に価値のある素材です。このツイートもアーカイブの中にありますので、この図3のように、検索結果として、津波に関するツイートも出ます。また、動画と写真も出ます。もちろん検索結果を絞りこむために複数の単語での検索もできます。

もう一つ発見する方法としては、種類別に指定して検索ができます。ウェブサイトのみとか、ドキュメントのみとか、——それも主にPDFのみにするとか、ウェブサイトから引っぱり出したドキュメントのみにするとか——、画像のみとか動画のみとか、音声、ツイートのみでも検索できます。もう一つ検索の例を紹介したいのですが、ハーバード大学はこの夏、南三陸町で町づくりのプロジェクトを宮城大学と地元の方々と一緒に行なっており、そのためここに注目しています。南三陸町を画像に限定して検索すると、ほとんどはヤフー・ジャパン (Yahoo! Japan) の「写真保存プロジェクト」の中にあるいろんな人が投稿した写真なのですが、一四〇〇ほどが検索結果として出ます (図4)。画像だけではなくすべての種類を検索しますと、南三陸町に関するのは四二〇〇ほどがヒットします。画像の他に、ウェブサイトが二〇〇ぐらいで残りはほとんどがツイートです。

あと発見のツールとして重要なのは、見つけた情報の表示方法です。

図4はリスト表示ですが、いわゆるサムネイル表示でいっぺんによりたくさんの検索結果を見ることができました。

そしてもう一つ、作成が技術的に難しかったわけですが、「地図」で検索結果を見たり、絞りこんだりすることもできます。位置情報が入っている写真などを地図で見ることができます。図5のように南三陸町へズームインすると、画像の検索結果を見ることができます。そして、それぞれの写真が撮られた場所を見ることが出来ます。右側では、町の人口、その市町村の境界を表示するか、いろんなレイヤー (layer) をつけることができます。この図では津波がどこまで来たのかを示す紫色のレイヤーをつけています。それぞれの写真は津波があったところで撮られたのか、津波が来なかったところで撮られたのか、すぐ分かります。また、時間軸を絞ったり広くしたりすることもできます。復興の過程を知りたい場合には、時間軸を少しずつ戻していくことで復興の過程を知ることが出来ます。震災直後の一か月間なら、こう絞るとドットの数がぐんと減るわけで、これ (図5) は震災直後の南三陸の写真になります。一つのドットをクリックするとまず写真そのものが小さく出てきます。二回クリックすると、より大きく出ます。同じく、地理情報が入っているウェブサイトやツイートなども地図で見たり、探したりすることもできます。ただ、ウェブサイトの場合には、地理情報のないサイトもかなりあるのです。

ここで強調したいポイントは、今まで見せているのはうちのウェブ 사이트が、ウェブ・アーカイブをつないで、パートナーのサイトを「の



図4 「南三陸町」画像検索結果



図5 「南三陸町」地図検索結果

ぞいている」だけだということです。例えば、「ヤフー写真保存プロジェクト」ならば、ヤフーが窓をあけ、私たちがそちらの写真をのぞいているということになるのです。元の情報を見たい場合は「ソース」のリンクを選んで、今度は例えばヤフーのサイトに行きます。こういった形で、私たちが作った検索装置でそれぞれのアーカイブにあるデータを網羅的に発見できる仕組みを紹介したのです。

三つめのキーワードは「参加」です。図6の右側にある「マイ・コレクション」という仕組みがポイントなのですが、特定の話題あるいは特定の場所に関心のある方は、「コレクション」を作れば、それと関連するものを集めてアーカイブの中に残すことができます。残すといってもここに元の材料のコピーをとっているわけではないんです。元のサイトへのリンクを入れてだけです。ただ感覚としては、作った人がそれらの材料を集めたように感じますので非常に使いやすいわけです。

ここで見せている例は私の同僚の関心を反映しています。現在研究所の所長を務めているテッド・ベスター (Ted Bester) 教授は日本の漁業に大変興味があり、漁業の復興がどうなっているかを見ています。それです、港を文字検索し、漁業をタグ検索しますと、一八ほどのウェブサイトが出てきます。このウェブサイトをクリックして面白いと感じた場合、ドラッグして右側にある「コレクション」の中に置く」と自分のコレクションに入ります。そのコレクションに名前をつけて保存もできます。(ここでは、図7のように、漁業という簡単な標題に

しました)。それから、地理情報を入れることもできます。この漁業コレクションを作った人が主に宮古周辺に関心があるとしたら、コレクションの中にある地図を使ってそこも選べます。また、自分のコレクションをよりかっこいい物にしたい場合は、表紙を作ることができるようになります。最後に、これが極めて重要なのですが、このコレクションを公開したいか、あるいは自分や自分の友達にそのリンクを教えて、限定された人たちにしか見せたくないかを決めることができるのです。このコレクション機能を公開したのが二〇一二年六月中旬、つい数週間前で、日本語にまだ翻訳していない箇所がありますので、英語の「LIMITED」(「限定公開」)になっています。(二〇一三年現在、日本語表示になっています——追記)。

コレクションを作ること「参加」の一つです。また、それを公開して他の人にコレクションを見てもらえば、対話の場となります。それもある種の「参加」と言えるでしょう。そして、もう一つの参加の形として、アーカイブを(自分のコレクションに入れている材料に限らず)より豊かなものにすることができ、誰もがキュレーターというか、誰もがこのアーカイブの自身をより正確なものにできます。このため、「タグを付け加える」という機能を使います(図8)。ここで、宮古の防波堤の写真をユーザーが見つけたと仮定します。問題は元の「ヤフー写真保存プロジェクト」でタグは「震災前」と「風景」としかないことです。ユーザーがこれでは足りないと考え、「防波堤」



図6 「マイ・コレクション」作成画面



図7 「マイ・コレクション」表示画面



図8 tag 追加機能

という単語をタグとして加えることにします。こんな風にしてアーカイブの中のメタデータはより豊かなものになり、アーカイブ全体がより使いやすくなります。これに関連していつも出る質問としては、間違えたことを入力する人がいるんじゃないか、というものがあります。もちろんいるかもしれない。いたずらで変な事を入れる人間がいる可能性もあります。しかし、ウィキペディア的な発想で、そのリスクより得ることが大きいということで、この形式で進めたいと思っています。

これで、「繋がり」「発見」「参加」の三つのキーワードを紹介したわけです。最後に、うちのスタッフが発表前に作った、わりといいコレクションの例、*Rebuilding and Relocating* というコレクションを簡単に紹介します。高台移転と町づくりに関心のある研究者ですので、それに関する地図や写真やツイートやウェブサイトをまとめてコレクションにしています。後でご覧になってください。今後はせっかく作られたコレクションの意義をより詳しく説明できる機能を充実させたいと思います。

今までの話でお分かりになったと思いますが、このプロジェクトの根底にあるのは、できる限り「知」を幅広く創造し共有することが大事だという発想です。民間企業がインターネットの世界で優勢となった時の懸念もありますが、それに対抗するというよりは、それプラス別な形での参加を可能にする。営利的な活動と非営利活動の共存を目指しているわけです。今日紹介したアーカイブのインターフェースの

根底にあるソフトのコードは全て英語で open source というのですが、誰でもいつでも使うことが可能で、自分のウェブサイトの仕組みとして導入することもできます。そしてより良いものを開発すると、今度はうちもそれを使うこともできます。そうなれば、動的公共空間としてこのデジタルアーカイブの存在意義が高まります。

今までの話でお分かりになるとと思いますが、この参加型アーカイブは常に変化し続ける、拡大し続ける企画です。例えば「インターネット・アーカイブ」の方で既にアーカイブ化されたウェブサイトは一三〇〇〇〇ほどで、五・五テラバイトという膨大な量があります。更に毎月新しい保存対象のサイトがそこに送り込まれています。

ここで紹介した色々な形での参加の可能性を提供することによって、アーカイブの作る側と使う側の壁をできればなくすこと、あるいは低くすることが目的です。繰り返しになりますが、誰もがコレクションをキュレートして自分の物語を生み出すことができます。そして「これは非常に理想的で無茶な夢だ。あなたは日本の現状あるいは世界の現状を知らない」と言われると仕方ないのですが、被災地にいる方々、あるいは研究者、あるいは政策立案者、そして一般市民にとっても有益な道具となることを目指しているわけです。今すぐというより、むしろ長期的に重要になってくるかもしれない。もちろん今現在はこちらのアーカイブを使わず、グーグルで検索するだけで、かなりの震災関係の情報を見つけることができます。きれいにコレクションすることはできないかもしれませんが、グーグルだけを使ってかなり

の情報をインターネットで探せます。ただ、それは今だけです。二年後、五年後、あるいは一〇年後、五〇年後、このようなアーカイブなしに、二〇一一、二〇一二年の東日本大震災の時の日本を知ることには大変難しいのではないかと思います。紙を保存する従来のアーカイブもそうですが、その重要性和価値は時が経つにつれて大きくなるのではないかと思います。

長く話しましたが、最後に、これからの課題と懸念について簡単に触れたいと思います。このプロジェクトをやり始めてから時々眠れない時があります。三つの理由で。一つは、うちのソフト開発チームは、約束するのがうまいですよ、みんな（会場…笑）。「これができます」また「これもできます」、「来月までに deliver（納品）します」って。一年数か月前までは、ソフト開発の人たちとつきあったことがなかったのですが、この一年間で学んだことは、ソフトの完成は大体遅れるし、最初は絶対うまくいかないということ。今回も七月一日に東京の国会図書館で発表しますから六月一日には deliver してください、一か月間は試したりしましょう、と言っていました。結局見せてもらったのは六月二〇日。徹夜で間に合ったんだけど、まだ完全ではないから。ですから、眠れない理由の一つは、開発チームが約束通りに作ってくれないこと（会場…笑）。が、最終的に大体間に合います。ちょっと遅くなったぐらいで。まだ上手く全部が機能しないことは仕方がないのです。

ときどき眠れなくなる二つめの理由はほぼなくなりました。図1で

見せたいいろいろなパートナー組織があるのですが、最初心配したのは皆さんが本当に快く自分が集めているものをシェアしてくれるのかということでした。自分のサイトで公開しているものですので、自分のサイトに来る人のみに使わせると言われるかもしれないと心配でした。逆に、あなたのアーカイブサイト経由で見せるのは困るという反応が出るのではとちょっと心配していました。でも、話してみるとこのような問題はほとんどなかった。

三つめの心配はいまだに最大の眠れない原因となっています。利用者が実際出てくるのでしょうか。誰がこのせつかく作ったアーカイブを使うのでしょうか。いまだに分かりません。おそらくある程度出てくるのではないかと。しかしどの程度？

その意味で、今日も質疑応答の時間にぜひこのアーカイブの利用の可能性についてご意見を聞きたいのです。「あなたはあまりにも理想主義者ではないか」とか、「いや、今の日本の学生はこういった仕組みを操作できるようになっている。高校生だったら間違いない」とか。いかがでしょうか。教育の現場でこのようなアーカイブを使えますか。例えば社会科で自分の町を勉強したいとする。先生がクラスをチームに分けて、四、五人ずつでコレクションを作り、情報を交換する教育のための道具として役に立つでしょうか。私たちはそう期待しているのですが、そうなるかどうかは分かりません。そしてもし使われるのであれば、どのように？ 何のために？

今、教育の例を出しましたが、どういったテーマで検索して、どう

いったテーマでコレクションを作るか。これも知りたい。私の同僚のベスター教授は文化人類学者なんですが、今年の春、日本の社会と文化を教える大学院の授業の最後に、大震災についてのプロジェクトを学生にやらせた。その時にこのベータ版がまだ出来ていなくて、やや単純だったアルファ版を使ってもらいました。それでもいくつか非常に面白い報告が出ました。コレクション機能はまだなかったけれども、ただ検索して、それを自分の研究報告の中で触れたり報告したりという形で使ったのです。例えば、ある学生は動物が震災の後いろんな意味で重要だったので、それについて調べました。救援活動で働いた犬もいたし、動物を探して救援するというケースもありました。そして、震災後の動物と人間をテーマにして、極めて面白い報告をまとめたそうです。ですから様々な利用の仕方があると期待しています。

ある地域に住む人たちが、その地域の経験を互いに記録に、あるいは記憶に留めたい場合にも使えるかもしれません。そうなった時の懸念はどの辺にあるか。一つは、もちろん公開アーカイブのみではすべてが分かるわけではないし、それを安易に考えてもらっては困るところにあると思います。特に政治の世界には、いろんなレベルがあります。中央の政治もあるし、自治体の政治もある。やっぱり公開したくない話はいっぱいあります。辛いから公開したくない。それはそれでももちろん公開しないでもいいんですが、例えば、新聞記者や研究者の本来の仕事は——歴史学者も同じですが——、ちょっと隠れたところにあるけれども重要なもの、例えば喧嘩や問題や何かを明るみに

出すところにあると思います。そのような調査はこのアーカイブに頼ってではできないと思います。それを忘れてはならない。公開アーカイブで、東電の話はある程度出てくるでしょう。何かを暴露した人が自分のウェブサイトに乗せたとか、それに対して反論があったとか。でも他の研究方法や他に情報を探す方法も、もちろん必要です。そしてもう一つ、私が心配している問題は著作権です。日本でも肖像権がかなり重要な問題となっていますが、個々人の権利を尊重しながら、公開アーカイブを作るのはどこまで可能なのか。ここ二、三日、国会図書館で、特に昨日、仙台の東北大学で議論した時は二時間ぐらいこの話をしました。今の日本、日本だけではなくアメリカもヨーロッパも他の国もそうだと思いますが、現在の法律はバーチャルな世界での情報の流通に追いついてないわけです。法律にも問題があると思います。材料の持ち主にも公開したいけど怖い、だから公開しない、クレームを付けられたら困る、といったような慎重すぎるぐらいの慎重さがあります。そして、時々それが言い訳になります。ある理由で公開したくない。けれどその理由を言いたくないから、肖像権の尊重という言い訳がましいことを言う時もあります。でもこれももちろん丁寧に取り扱わないといけない問題です。今の私の感じでは、日本では皆さんが極めて慎重。場合によっては慎重すぎるぐらい慎重です。特に情報の共有となると、これがこれからの課題となるわけです。

話が長くなりました。このアーカイブの仕事をやり始めた背景に

は、まず何かしなくてはならないというわりと単純な発想がありました。大変な時に研究者として何かしなければいけないという発想。段々とその何かは、ただ情報を集めるだけではなくて、コミュニティ作りというか、対話の場を形成するための仕事になったと感じるようになりました。話はこの辺で終わりにしたいと思います。コメントや質問をお願いします。ご清聴ありがとうございました(会場…拍手)。

〔質疑応答〕

——NHKなど日本のメディアと連携する計画はあるのでしょうか。

ゴードン氏 良かった。それを聞いて欲しいと前もって頼んでいたわけではないのですが(会場…笑)、その質問は出て欲しかった。もちろんそういった情報も取り入れたいです。NHKと商業ベースのメディアのやり方は違うはずなのに、どうもNHKも商業ベースのメディアと似たような姿勢に今のところなっている。非常に残念に思っています。

例えば、河北新報とか朝日新聞、読売新聞などは商業ベースです。記事を全部無料で私たちのアーカイブ経由で見せてしまうと自社の有料データベースの意味がなくなります。ですから、次のような線で今、交渉中です。河北新報は、現地で貴重な記事をたくさん書きました。四万ほど記事があるそうです。信じがたいのですが本当です。一年三か月で四万という数字は、一日一〇〇に近いのです。新聞全部が大震

災関連のニュースということになるのです。幸い、その見出しデータベースが作られています。東北大学のプロジェクトが河北新報と協力しているのです、そこを通じてうちと結びついています。目指しているのは二〇一三年か一四年中に、この日のこの記事にこの話題についてこういった見出しがあった。そういう情報をアーカイブに入れることです。例えば先ほどと同じく、南三陸を検索したら南三陸について河北新報に載った記事が見出しだけ出てきます。それを読みたければ、クリックすると、「この記事を全文読みたければ会員登録してください」と出ます。正直言うと河北新報もうちよっとオープンにしたらいいと思うのですが、向こうのスタンスは理解できません。朝日の方にも似たような交渉をしています。二社ぐらい入るとその後は似た感じで参加してくると思います。

今のところ、NHKには同じことを言っているのですよ。NHKも自分の大震災放送アーカイブを立ちあげています。すばらしいコンテンツです。「じゃあ、今度はこちらのサイト経由でNHKが撮った動画を写真やウェブサイトと同じくリストに表示し、そのまま見ることができるようになります」と提案しました。だが今のところ、河北新報や朝日の見出しと同じように動画のリストをうちで見せるだけで、見たいならばNHKのウェブサイトに来てそこで見るようにすることしかできない、との返事です。それほど悪い返事でないけれど、うちよっと積極的に協力していただきたいのです。NHKは国民の税金を直接使っていないのですが、税金に近い形で維持されています。だ

から商業ベースの新聞と性格が違うのではないかと思いますので、もうちよっと積極的になるといいなというのが私の率直な感想です。

（結局、NHKは快く私たちのアーカイブに直接NHKアーカイブの内容を公開することにはしてくれませんでした。心から感謝します。——追記）。

——いくつか質問させていただきます。一つめは、ツイートの収拾についてです。ツイートを収拾するとすると、膨大な数を収拾するイメージがあります。その場合、ツイートなどは大本をたどって収拾されているのか、それともツイートされた数も含めて全部保存されているのか。二つめは、震災に関するデマがツイートを介して広く回ったことが問題視されました。そういったデマも含めて全部を収拾するとうい姿勢なのか、それともそれはキュレーションの過程で選別されて残されるのか。情報の真偽について、どのように考えて収拾されているのでしょうか。

ゴードン氏 両方とも重要な質問で、特に二つめは難しいです。このコレクションは六〇万ほどあり、私はまだ全部読んでないんですが、ツイートもリツイートも両方入っています。それは大震災関係のいろんなタグが付いたものです。今もいくつかのタグのツイートを集め続けているんですが、数が徐々に増えているわけです。私はツイッターのアカウントを持っていないし、あまり縁のない世界です。でも、若いスタッフがツイートの分析は重要だ、ネットワークがどうなるかという非常に高度な分析もあれば、一つ一つ読んでその内容を見るミク

口な分析など色々あると言うので、集めているわけです。その中には、例えばデマがあるかどうかについて私は確かめてないのですが、あるかもしれません。

あと、ウェブサイトもそうです。講演で言い忘れたのですが、「インターネット・アーカイブ」と手を組んで集めているウェブサイトの多くは日本語の、日本発信の日本語サイトですが、日本の組織が英語で発信しているサイトもあれば、他国発信の英語サイトもあるし、中国発信のサイトもかなりありますし、韓国も少しある。だからその中にも——デマは外国に限ってではないのですが——、外国からのデマもあり得るわけです、ツイッターも同じです。

それをフィルタリングして削るのではなくて、将来の研究あるいは今の研究の中で真偽を決めるのは使う人や研究者であると考えています。もちろんデマを信じてしまうリスクはあるんですが、デマなどなかったかのように目をつむってしまうリスクの方が大きいと思うんです。この春、学部の学生がこのアーカイブがまだ公開されていなかったら、グーグルを使って、面白い卒論を書きました。日本のあるウェブサイトで、中国の四川地震の時に、あいつらがそうなって良かったとかいう日本発信の非常に厳しい声があった。それを中国人が読んで憤慨して反論する。それで今回は仕返しというか、中国発信のサイトが東日本大震災に対してデマ的な非常に厳しいことを書く。そのプロセス、やりとり、それを分析した極めて冷静で立派な卒論を書いた学生がいたわけです、その意味ではそれらのサイトやツイッターを残

す意味があるのです。

もしかしたら私たちは注意書きを付けるべきかもしれませんが、「この中には様々な情報があります。私たちは検閲していませんので、デマ的なところがあることもご理解ください」とか、入れるといいのでしょうかね。

——二つお伺いしたいことがあります。一つはファンディングのことです。立ちあげ後のメンテナンスにも相当お金がかかると思うのですが、どう維持されていくのでしょうか。二つめは、いま大震災が一つの転換点として、明治の「開国」と昭和の「敗戦」に次ぐ「第三の開国」と言われたり、逆に結局これまでとあまり変わらないのではないかとというような議論があったりします。歴史学者として、この過程でいろいろな資料をご覧になったゴードン先生は、この東日本大震災が何か一つの転換点になるとお考えでしょうか。

ゴードン氏 まず、お金の話ですが、うちの研究所は非常に運がいいというか、かつて予算を使ってなかった時もありました。日本の、特に私立大学がどうなっているかわかりませんが、公立では三月末までに使わなければ予算を戻さなくてはならないから、皆ものすごく無駄遣いをするんですよ（会場…笑）。これは冗談に聞こえるけど、冗談じゃないんです。うちの研究所は、だいたい毎年三月半ばに日本のどこから依頼が来ます。「ちょっとお尋ねしたい。あなたのところでシンポジウムをしたい。うちが費用を全部持つから場所だけくれ」というわけです。時々「ごめんなさい」と言うんですけど、向こうが来る

理由はただお金が余ったので使わなくちゃならないということなんです。幸いうちの大学では、積立金みたいに毎年使っていない予算を予備金として持つことができます。何のためにとってあるのかというと、やっぱりいざという時に使うためです。二〇一一年三月一日。これは「いざという時だ」とみんなで決めたので、このアーカイブ作りに乗り出すことができました。

その後、外からの grant〔助成金〕も探しました。国際交流基金から grant をもらいましたし、他のアメリカの財団にも話をしているところです。なんとかなると思います。日本の総務省もデジタルアーカイブのプロジェクトを支援する予算を、億単位で準備しています。それがうちの方に直接入ってこないことは当然です。やっぱり日本国内で使わないといけないと思います。でもうちのパートナー組織がそれをもたらすと、うちのアーカイブも連携型ですので、間接的ですがより豊かな情報を共有できます。

二つめの質問、この大震災が転換期になるかですが、これについてはずっと考えてるわけです。御厨貴先生が最近出した本のタイトルで「戦後から戦後へ」という表現を使っていました。震災後という意味の「戦後」。私も震災は分岐点になるうと思っていますが、それを単純化すると可能性は二つある。一つは、物事が極めて大きく変わる契機、改革や何かが起こる分岐点になる可能性があります。もう一つは、従来の問題、従来の社会・政治・経済の中にある矛盾や問題がより深刻になるだけという可能性です。問題や領域によって、両方あり得ま

す。原発となると今のところは従来の矛盾が先鋭化しただけでなくて、かなり大きな変化があるように感じますが、判断するにはまだ早いですね。

でも、この質問は極めて重要です。まさに、私も同僚も、皆さんも考えていると思います。日本を変えたいと思う人は大体、この大震災を契機に方向性を変えなくちゃならないと考える。それぞれが自分の思っている方向に大震災をもつていこうとするわけです。でも皆それぞれ、従来と同じ方向性で行こうとすると、従来のいろんな亀裂や対立がそのまま深くなるだけです。それが私の心配していることです。私が望んでいる方向に持っていきたいわけですが、どうなるでしょうか。

——こういうことは本来、民間のどこかがやってくれるのに任せるのではなく政府がやるべきだとお考えでしょうか。それとも、政府が民間の情報を漁ってまとめるようなことはすべきではないとお考えでしょうか。

ゴードン氏 そうですね、国会図書館もかなりこの領域で仕事を行なっているのですが、法的な枠組みの中でも、あるいは国会図書館独自の規則の中でも、公的サイト——自治体、政府機関、内閣などの情報のみ集めることになっています。他方、「インターネット・アーカイブ」は、民間サイトの情報を集めている。外国にある組織ですの、「それはちょっとどうか」と日本では思う人がいるかもしれない。何かアメリカでたくらんでいるんじゃないか(会場・笑)、あるいはC I

Aと何か手を結んでいるんじゃないかとか、言う人も出てくるかもしれませんが。それはないと信じていますが。

先ほど法律が事態に追い付いてないと言いましたが、まさにこのことだと思います。本ならば出版物ですね。国会図書館は何も政府が出した本だけを集めるのではなくて、どんな本でも全部集める権限を持つわけです。ウェブサイトを出版物に例えるならば、すべてを保管する権利を持つはず。でも今、その権利はない。民間サイトを保存するのは国会図書館が怠けているんじゃないかと、日本の法制に問題があります。

このようなウェブアーカイビングにアメリカの国会図書館がどれほど取り組んでいるのか、私の知識不足で定かではありません。しかし他の国でどうなっているか、もうちょっと知るべきです。これは日本に限っての問題ではないでしょう。やっぱり将来に向けて、ウェブサイトとの扱いを変える方がいいのではないかと思います。ただすべてを政府がやるとかえって困るところもある。ですから、これは非常に難しい問題ですね。でも、もうちょっと政府がやるといいのではないかという気がします。

——世界的に見た時にこの大震災、そしてこの記録がどういう意味を持つとお考えですか。

ゴードン氏 そうですね、これは重要な質問です。厳しい言い方かもしれませんが、東日本大震災には二つの「震災」が含まれていると考えられます。海岸沿いの津波被害と福島。世界史的には、やっぱり

福島がほとんどになると思います。もちろん沿岸の津波の悲劇を世界の皆が忘れるということはないけれども、一番関心を持つのは福島のメルトダウンだと思えます。そのため、将来的には東日本大震災のより大きな意味はそちらの方になると思います。

もう一つは、より一般的に、より広く解釈すると従来の権威、科学に対する疑問、権威の喪失があげられます。原子力発電所は絶対安全だと言ってきた工学者とか、地震を予測できるというのが日本の地震学の根底にあったけど、それならばどうして東海でもなく南海でもなく東北に地震が起こったのかという、権威に対する疑問。日本の、あるいは世界の seismology 「地震学」を考え直すきっかけになるかもしれません。あとは、防波堤などを造れば大丈夫だという工学者、その分野の正式な日本語は分かりませんが hydraulic engineering 「水理工学」の権威もかなり落ちたと思います。その意味では、我々の技術や科学ではどれほどのことができるかという権威に対する疑問を世界に投げかけた大事件・大災害になる。そういうことにもなるのかなと思います。ただ権威を持っていた人間は一生懸命それを取り戻そうとしているわけですから、どうなるでしょうか。分かりません。

——「対話の場として」とおっしゃっていましたが、具体的にどういった「対話」を想定されているのでしょうか。または、これまでどういう「対話」がなされたのでしょうか。

ゴードン氏 そうですね、今のところは、うちの研究所と他のアーカイブ作りに取り組んでいる人たちで対話ができたことは、意味があ

ると思います。将来考えているのは、どこかのコレクションを作りたい人、他の人のコレクションを見て刺激され、それに対して何かするという対話は一つのあり方です。今のコレクション機能では、長い説明を書けないんですね。作った人が一つの同じコレクションの中にこれらの物をどうして入れたかを、見た人は自分で考えなければならぬいわけです。もうちょっと説明がつけられる、あるいは、集めた材料を巧みに披露できる仕組みを作れば対話が増えるでしょう。それに向けて今努力しています。そして例えば、一〇〇とか、あるいは一〇〇〇ぐらいコレクションができると、今度このアーカイブを使う人は、その中身だけではなくて、その中身を見て何を作つたらいいかヒントを得ます。あるコレクションを見てこの立場は間違っていると思えば、今度は違う立場からコレクションを作り出すとか。そういう意味での対話を期待しているのですが、できるか分かりません。しばらく時間がかかると思います。

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター

第14回 丸山眞男文庫記念講演会

世界に向けて 東日本大震災を 記録する

—危機アーカイブの効用と構築のための課題—

*Building a Digital Archive of the Great Eastern Japan Disaster:
Potential and Challenges of Crisis Archiving*

講師: アンドルー・ゴードン氏
(ハーバード大学教授)

日程: 2012年7月5日(木)
時間: 16:30~18:00
会場: 東京女子大学 24202教室
東京都杉並区善福寺2-6-1



JR西荻窪駅北口より徒歩約12分。
西荻窪駅北口より吉祥寺駅行きバス／JR・京王井の頭線吉祥寺駅北口より西荻窪駅行バスで「東京女子大前」下車。

問合せ先: 東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター
Tel 03-5382-6817
marubun@lab.twcu.ac.jp

申込不要 入場無料 (講演は日本語で行われます)

【講演の概要】

東日本大震災の救援と復興に際しては、国内だけでなく、国外からも多くの支援の手が差しのべられました。なかでも、アメリカの近代日本研究をリードするアンドルー・ゴードン教授を中心とするハーバード大学のプロジェクト「2011年東日本大震災デジタルアーカイブ」

(<http://jdarchive.org>)は注目すべきものです。今回の震災と復興において飛び交った無数のデジタル情報を収集し保存するこのプロジェクトは、震災の状況や復興の経験をトータルに把握し、国際的に共有することで、将来に生かすとともに、被災者の方々にとっての心の癒しとなることをめざしています。

これと時を同じくして、東京女子大学は2012年度より、丸山眞男文庫所蔵資料のデジタルアーカイブ化事業を柱とする研究プロジェクト「20世紀日本における知識人と教養—丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用—」を開始しました(文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」プロジェクト)。また、昨年より行ってきたボランティア活動をより積極的に展開するため、東京女子大学ボランティア・ステーションを開設しました。そこで、今年度の丸山眞男文庫記念講演会には、ゴードン教授をお招きし、「2011年東日本大震災デジタルアーカイブ」への取り組みを通じて追求されている災害デジタルアーカイブの意義と課題についてお話いただくことといたしました。

【講師プロフィール】

アンドルー・ゴードン氏 Andrew Gordon

1952年生まれ。ハーバード大学教授、同大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所所長。日本近代史専攻。日本語に訳されている『歴史としての戦後日本』(編著、みすず書房、2001年、上・下2冊)、『日本の200年 徳川時代から現代まで』(みすず書房、2006年、上・下2冊、新版近刊予定)や『日本人が知らない松坂メジャー革命』(朝日新聞社、2007年)は高い評価を受けている。その他に、*Labor and Imperial Democracy in Prewar Japan* (University of California Press, 1991、アメリカ歴史学会ジョン・K・フェアバンク賞受賞)、*The Wages of Affluence: Labor and Management in Postwar Japan* (Harvard University Press, 1998)などの名著がある。また、本講演に関連する文章として、「2011年東日本大震災デジタルアーカイブ」(共著、『みすず』2012年6月号)がある。



【丸山眞男文庫とは】

政治思想家として世界に向けて発信し続けた丸山眞男の膨大な蔵書と草稿類の寄贈を機に東京女子大学は、丸山眞男記念比較思想研究センターのもとに丸山眞男文庫を設立し、資料の調査と公開を進めるとともに、講演会、読書会、公開授業等も開催しています。